

Propertius, 2. 11. 2 における sterili ... humo の 解釈について

平野智晴

laudet, qui sterili semina ponit humo.

讃えるがよい、不毛な大地に種を播く者は。

Prop. 2. 11. 2*¹

2 laudet ζ : ludet Ω

本論は、Propertius, 2. 11. 2 における sterili ... humo の解釈について再考するものである。

一般に、sterili semina ponere humo とは「労力を無駄にする」という意味の慣用的な表現であり*²、ゆえに、本詩行において、詩人のペルソーナはおよそ次のような内容を意図していると考えられている。すなわち：「これまで私は恋愛詩を書き讃え求愛してきたが、この女の多情な性質に振り回されること度々で、結局のところ、この求愛は受け容れられることなく終わってしまった。これからは、他の男たちが私の代わりに恋愛詩を書き讃え求愛すればよい。しかし、結局のところ、この女

*¹ テキストは大多数の写本の採用するところに、apparatus criticus は Heyworth^b の情報に拠った。以下、プロペルティウスのテキストはこの方針に従って引用する。

*² Otto 159 s. v. harena. 4), Fedeli 335-336.

のこうした性質に振り回され、その求愛は受け容れられることなく終わるであろう」。

多くの註釈者は、上記の理解に基づいて、後続する 2. 11. 3-4 *omnia, crede mihi, tecum uno munera lecto / auferet extremi funeris atra dies* において、*omnia ... munera* は、女に捧げる求愛詩のことを指しているか、あるいは、詩人も含めた男たちの物質的な貢ぎ物のことを指している、とする*³。つまり、ここで、詩人のペルソーナは、男たちが捧げた求愛詩や貢ぎ物も、いずれ、彼女が死んだときにはその遺体に添えられ、茶毘の火によって焼かれてしまうであろう、と言うのである。ゆえに、2. 11. 2 は、具体的には、次のように解釈されることになる、すなわち：「この女を詩によって褒めそやしたり贈り物を買いだりして求愛したい者は、そうすればいい。しかし、その求愛は受け容れられることなく終わり、全ては灰燼に帰し、現世にも冥界にも残らないであろう」*⁴。

しかるに、一部の註釈者は、後続する 2. 11. 3-4 *omnia, crede mihi, tecum uno munera lecto / auferet extremi funeris atra dies* において、*omnia ... munera* は、2. 2、2. 3a で詳しく述べられ、最終的に 2. 3a. 25 *haec tibi contulerunt caelestia munera diui* と結論付けられる、キュンティアの驚くべき天賦の才 *caelestia munera* を振り返っている、と考えている*⁵。すなわち、ここで、詩人のペルソーナは、かつてはそのように絶賛した天賦の才も、今は、もはや書き讃える価値のない茶毘の火によって滅び

*³ あるいは、好き合っている男女に対して、金持ちが女を買い上げるために男に与える贈り物、という意味に取ることもできる。Camps は、そのような読みを提案し、2. 16. 15 *ergo muneribus quiuis mercatur amorem?*; 2. 16. 21 *numquam uenales essent ad munus amicae* を引用する (Camps 112 ad XI 3)。

*⁴ 例えば、Heyworth は次のように描写する、他の者の贈り物を目の当たりにしてうんざりしてしまったプロペルティウスはキュンティアに別れを告げ他の誰かが彼女のことを歌うかどうかは関心がないと嘯く、彼女は財産を持って (冥界には) 行けない、そして、見捨てられた墓石が待っている、と (Heyworth^a 158)。

*⁵ BB 210 ad II. XI. 3.

るべきものに変じた、と言うのである*6。ゆえに、2. 11. 2 は、具体的には、次のように解釈されることになる、すなわち：「この女の才能はもはや私にとって詩作の労力と時間を傾けるに値しない素材となった。他の男たちは、そのような素材で詩を書けばよい。しかし、それは空しい詩作となるであろう」*7。

これに加えて、私は、2. 11. 2 sterili ... humo 自体にも、上記のような詩論的な意味が読み込まれ得ることを指摘したい。すなわち、これは、2. 10. 11-12 *surge, anime, ex humili! iam, carmina, sumite uires! / Pierides, magni nunc erit oris opus* を振り返っている、と考えるのである。詩人のペルソーナは、2. 10. 8 *bella canam, quando scripta puella mea est* と宣言し、恋愛詩から叙事詩への移行を仄めかし、詩作を行う魂は、「ムーサたちの力を借りて、低いところ (= 恋愛詩) から (高いところ (= 叙事詩) へ) 立ち上がろうとする」。このことを踏まえたとき、2. 11. 2 は、次のように解釈されることになる、すなわち：「他の男たちは、後からやって来て、このような「低いところ」で種を播く (i. e. 恋愛詩というジャンルで創作を試みる) がよい。しかし、それは、収穫を望めず (i. e. 詩作品を作り出すことができず)、空しい詩作となるであろう」。

しかし、そもそも、ソフォクレスの有名な詩句を踏まえることがしばしばあった詩人が*8、sterili semina ponere humo などと書くとき、彼が、

*6 Lyne 28.

*7 id. 33.

*8 第2巻において、ソフォクレスの詩句を踏まえたと考えられる主要な例を以下に示す：2. 8. 21-28 *quid? non Antigoniae tumulo Boe<o>tius Haemon / corruit ipse suo saucius ense latus / et sua cum miserae permiscuit ossa puellae, / qua sine Thebanam noluit ire domum? / sed non effugies: mecum moriaris oportet; / hoc eodem ferro stillet uterque cruor. / quamuis ista mihi mors est inhonesta futura: / mors inhonesta quidem, tu moriere tamen* は、ハイモーンの自死の描写 *Ant.* 1234-1241 εἶθ' ὁ δύσμορος / αὐτῷ χολωθεῖς, ὡσπερ εἶχ', ἐπενταθεῖς / ἤρεισε πλευραῖς μέσσον ἔγχος, ἐς δ' ὕγρὸν / ἀγκῶν' ἔτ' ἔμφρων παρθένῳ προσπύσσειται / καὶ φυσῶν ὀξεῖαν ἐκβάλλει ροήν /

いささか粗野な台詞であることで印象深い、S. *Ant.* 569 ἀρώσιμοι γὰρ χᾶτέρων εἰσὶν γύαι.; S. *OT.* 260 ἔχων δὲ λέκτρα καὶ γυναιχ' ὀμόσπορον; *id.* 1497-1498 τὴν τεκοῦσαν ἤροσεν, / ὄθεν περ αὐτὸς ἐσπάρη 等をまるで念頭に置いていなかった、というのも不自然であるように思われる。

かつて、詩人は、子を生す生さぬという問題を採り上げたことがある：
2. 7. 13-14 unde mihi patriis natos praebere triumphis? / nullus de nostro sanguine miles erit; 2. 7. 19-20 tu mihi sola places; placeam tibi, Cynthia, solus: / hic erit et patrio nomine pluris amor.⁴⁹ ここで、彼は、エレグイ

λευκῆ παρειᾷ φοινίου σταλάγματος. / κείται δὲ νεκρὸς περὶ νεκρῶ, τὰ νυμφικὰ / τέλη λαχὼν δεῖλαιος ἔν γ' Ἀίδου δόμοις, ...をただ踏まえるだけでなく、それと共にエーレクトラーのオレステースの偽の骨壺を抱いての詠嘆 *El.* 1165-1167 τοιγὰρ σὺ δέξαι μ' ἐς τὸ σὸν τόδε στέγος, / τὴν μηδὲν ἐς τὸ μηδέν, ὡς σὺν σοὶ κάτω / ναῖω τὸ λοιπὸν をまぜこぜにしている（アンティゴネー・ハイモーンの死について、プロベルティウスの引用に偏向が見られることについて、cf. *BB* 205 ad 21. しかしながら、cf. *Camps* 102 ad 21-2) ; 2. 13b. 43-44 atque utinam primis animam me ponere cunis / iussisset saeuus de tribus una soror は、次の詩句を踏まえているものと思われる：*OC.* 1225-1226 μὴ φῦναι τὸν ἅπαντα νι-/κᾶ λόγον· τὸ δ', ἐπεὶ φανῆ, / βῆνα κείθεν ὄθεν περ ἦ-/κει πολὺ δεῦτερον ὡς τάχιστα. もっとも、Jebb が指摘するように、この詩句には次の先例がある：*Thgn.* 425-428 πάντων μὲν μὴ φῦναι ἐπιχθονίοισιν ἄριστον, / μὴδ' ἐσιδεῖν αὐγὰς ὄξιος ἡελίου, / φῦντα δ' ὅπως ὄκιστα πύλας Αἴδαο περῆσαι / καὶ κείσθαι πολλὴν γῆν ἐπαμησάμενον (cf. *Günther* 273, *Jebb* 194 ad 1225) ; 2. 20. 3-8 quidue mea de fraude deos, insana, fatigas? / quid quereris nostram sic cecidisse fidem? / non tam nocturna uolucris funesta querela / Attica Cecropiis obstrepit in foliis, / nec tantum Niobe bis sex ad busta superba, / sollicito lacrimans defluit a Sipylo において、プロベルティウスは、名指しされない女が詩人の誠実を疑い嘆く様子をフィロメラー（もしくはプロクネー）とニオペーのそれに喩えているが、この二人の組み合わせは恐らくエーレクトラーの詠嘆に由来している、cf. *El.* 145-152 νήπιος ὄς τῶν οἰκτρῶς / οἰχομένων γονέων ἐπλάθεται. / ἀλλ' ἐμέ γ' ἄστονέσσο' ἄραρεν φρένας, / ἅ Ἴτυν αἰὲν Ἴτυν ὀλοφύρεται, / ὄρνις ἀτυζομένα, Διὸς ἄγγελος. / ἰὼ παντλάμων Νιόβα, σέ δ' ἔγωγε νέμω θεόν, / ἅπ' ἐν τάφῳ πετραίῳ, / αἰαί, δακρῦεις (cf. *Günther* 287, *Fedeli* 594) (本文または脚註におけるソフォクレスのテキストは、*Lloyd-Jones & Wilson* に拠った) .

⁴⁹ 上流階級における出生率低下を食い止めるため、28年、アウグストゥスは、当該階級に対し結婚と子を生むことに報酬を与え独身者には重税を課す法律 *lex de maritandis ordinibus* を施行しようとした。プロベルティウスにとっても上流階級の女と結婚しキュンティアと別れることを強要するものであったこの法は、しかしな

ア詩人の恋というものは恋にだけ身を棄すものであって、子を生すことなど考えもしないものである、ということを明確に打ち出している。彼にとって、子を生すための恋などではなく、恋のための恋・情欲のための情欲、そのような「純粋な愛」こそが、エレゲイア詩人の恋として相応しいものである。しかし、他の男たちの存在によってキュンティアとの関係が破綻していき、彼は次のように訴えるに至る：2. 9. 19-22 at tu non una potuisti nocte uacare, / impia, non unum sola manere diem! / quin etiam multo duxistis pocula risu: / forsitan et de me uerba fuere mala. このような事情を踏まえたとき、2. 11 では、これらの詩句が振り返られることで、かつて誇っていた「純粋な愛」がその価値を覆され、まるで「不毛の愛」であるかのように語られている、とも解釈されるのである。

すなわち、詩人のペルソーナは言うのだ：「他の男たちが手に入れようとしているのは、子を生すこともない不毛な愛に過ぎない。それでも、彼らは、それを得ようと彼女を讃える求愛詩を書き、貢ぎ物をするがよい」。もっとも、この罵りは、詩人自身がかつてそうであったことについて自ら嘲りつつ回想して見せている、という方に、重点が置かれているのかも知れない。すなわち、彼は言うのだ：「私もまた実のところ、求愛詩によって彼女を讃え、貢ぎ物をして来たのだ、子を生すこともない不毛な愛に身を棄して」。

無論、sterili ... humo という表現には、いずれの解釈においても、さらなる含みが読み込まれるはずである。

例えば、「求愛詩を書いたところで、実を結ぶことなく終わるのである」と言われるときも、それは、同様に、自らがこれほどまでに才能の限りを尽くしても受け容れられなかった求愛詩を、他の者が今さら手をつけたところで、彼女に受け容れられるようなことにはならないであ

がら、抵抗があまりに強かったため、報酬を増やし重税を減らすなどの措置によって事実上の撤回に追い込まれた。この詩の歴史的背景については、cf. Richardson 229-230, Camps 97.

ろう (i. e. 彼女は、それほど容易に口説き落とせるような女ではないのだ)、という、自信を垣間見せることになる。

あるいは、「書くに値しない素材」を「讚えること」が「不毛である」、あるいは「地位の低いジャンル」で「詩作をすること」が「不毛である」、と言われたとしても、それは、詩人のペルソーナが才能の限りを尽くして書き尽くしたものであるがゆえに、他の者が今さらこれに手を付けたところで比肩しうる優れた詩など書けるはずもなく、結局そのような詩作は徒労に終わるのであろう、という、自信を垣間見せることになる。

そして、「他の男たちが手に入れようとしているのは、子を産すこともない不毛な愛に過ぎない」と言われるときも、また、それが翻って、「私がかつてこの身を褒めていたのは (、やはり)、恋のための恋・情欲のための情欲であるところの「純粋な愛」であった。私は、自らの詩作によって、この「純粋な愛」を後世に残そうとしているのだ (が、他の男たちは、これに追随し、「純粋な愛」を得て、自らの詩作によってこの「純粋な愛」を後世に残す、などということはできないであろう)」という自信を垣間見せることになるのである、cf. 2. 7.

こうした含みは、2. 11. 1 *Scribant de te alii uel sis ignota licebit; 6 nec dicet: 'Cinis hic docta puella fuit.'* によっても裏付けられる。

すなわち、*uel sis ignota licebit* 「いやむしろ、お前は知られないことになるだろう」と言われるとき、これは、事実上「他の男たちが女を讚える詩を書いたところで、女の名が公に知れ渡るほどの素晴らしい詩にはならないであろう」ということを意味している：cf. 2. 1. 1-2 *Quaeritis unde mihi totiens scribantur amores, / unde meus ueniat mollis in ora liber;* 2. 20. 21-22 *septima iam plenae deducitur orbita lunae, / cum de me et de te compita nulla tacent;* 2. 24a. 1-2 *'Tu loqueris, cum sis iam noto fabula libro / et tua sit toto Cynthia lecta foro?'*.

また、(2. 11. 5 ... *contemnens ... uiator, /) nec dicet* と限定されてはいるが、詩人によって '*Cinis hic docta puella fuit*' と言われるとき、彼女が

学識高い女であったことが、まさに、ここに書き記され伝承されることになるのである。詩人は次のように言っているのだ、すなわち：「通りすがりの旅人は、君の墓碑を見て言わないだろう、「学識高い女だった」とは。しかし、私はまさに墓碑をここに書き込んでいるのであり、この詩集の読者は、すべて「学識の高い女だった」と読むであろう」、cf. 2. 2; 2. 3a.

そして、この最終行の地点に立って、これまで書かれてきた詩の数々を振り返ったとき、私たちは、読者として、まさに、恋のための恋・情欲のための情欲であるところの「純粋な愛」の諸相を目の当たりにしてきたことを感得するのである。

恋愛詩の詩作に対する「否定」と「誇り」の感情、そして、詩人のペルソーナの愛の「不毛」と「純粋」の意識。sterili semina ponere humo には、先行する作品を回想するにあたって、相反する価値観が同時に読み込まれるものと思われる*10。

参考文献

- Butler, H. E. and Barber, E. A. ed., *The Elegies of Propertius* (Oxford 1933). [BB]
 Camps, W. A. ed., *Propertius Elegies Book II* (Cambridge 1967). [Camps]
 Enk, P. J., *Sex. Propertii Elegiarum Liber Secundus*, 2 vols. (Leiden 1962).
 Fedeli, P. ed., *Properzio, Elegie Libro II* (Cambridge 2005). [Fedeli]
 Fedeli, P. ed., *Sextus Propertius Elegeiarum Libri IV* (Teubner; Stuttgart

*10 本論は、東京大学西洋古典学研究室で2013年度に開講された「ラテン語韻文講読」（大芝芳弘教授担当）において、筆者が行った口頭発表を元に作成された。当日の発表にあたって、出席者から有益な示唆を頂いた。また、本稿を作成・推敲するにあたって、二名の匿名査読委員から貴重な助言を頂いた。着想から推敲まで関わって下さった全ての方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。無論、本稿に残る不備は、筆者の責任に帰するものである。

- 1984).
- Goold, G. P. ed., *Propertius, Elegies* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 1990).
- Günther, H-C. ed., *Brill's Companion to Propertius* (Leiden and Boston 2006).
- Heyworth, S. J., *Cynthia* (Oxford 2007). [Heyworth^a]
- Heyworth, S. J. ed., *Sexti Properti Elegos* (OCT; Oxford 2007). [Heyworth^b]
- Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays, Oedipus Coloneus* (Cambridge 1900. Repr. London 2004). [Jebb]
- Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclis Fabulae* (OCT; Oxford 1990). [Lloyd-Jones & Wilson]
- Lyne, R. O. A. M., 'Propertius 2.10 and 11 and the Structure of Books '2A' and '2B'' *JRS* 88 (1998) 21-36. [Lyne]
- Murgia, C. E., 'The Division of Propertius 2' *MD* 45 (2000) 147-242.
- Otto, A., *Die Sprichwörtlichen Redensarten der Römer* (Hildesheim 1962). [Otto]
- Richardson, L. ed., *Propertius, Elegies I-IV* (Norman and Oklahoma 1976). [Richardson]
- Ross, D. O., *Backgrounds to Augustan Poetry* (Cambridge 1975).
- Rothstein, M., *Die Elegien des Sex. Propertius I* (Berlin 1898. Repr. 1966).
- Shackleton Bailey, D. R., *Propertiana* (Cambridge 1956).
- Wyke, M., *The Roman Mistress* (Oxford 2002).